

# 二〇二〇年度入学試験問題 国語（五十分）

二月一日(午前) 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は21ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答用紙だけでなく問題冊子も集めます。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督かんとくの先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

その少年の顔を見たとき、飼育係の亀山かめやまさんは、あれっと思った。<sup>①</sup>

はつきりおぼえていたわけではないけれど、たしか毎日のように見る顔だ。毎日、動物園に通う子どもなんているのかなと、亀山さんは思った。

あれっと思ったのは、そのときが火曜日の午前十一時だったからだ。

少年は、小学四、五年生くらいに見えた。三年生かもしれないし、六年生かもしれない。動物のとしはいつぱつであててしまいう亀山さんだが、人間のとしはなかなかわからないようだ。二十一歳さいの人に三十歳ですかとたずねてしかられたり、四十歳の人に二十九歳ですかとたずねて、よろこばれたりしている。

ともかく、その少年は小学生にちがいない。そうだとすると、いまはとうぜん学校にいる時間だ。

亀山さんは首をひねった。少年は、ちらつと亀山さんを見て、すたすた行ってしまった。

そのつぎ、亀山さんがその少年に会ったのはタヌキのオりの前だ。そのときは午後だった。少年はまばたきもしないでタヌキを見ていた。

ここでも亀山さんはおやつと思ったんだ。<sup>②</sup>

タヌキの横にはアライグマがいた。アライグマは動物園の人気者だ。なんたってアライグマは人なつっこいのだ。手と足をどうじにだして、ちょこちょこ歩くと、それだけでたいいの見物客はわらってしまふ。人間によくなれて、おちようだいをするようなかつこうで、ものをねだったりもするんだ。ビスケット、キャラメル、落花生ちっかせい、アイスクリーム、アイスクャンデー、パン、タマゴ、おすし、かまぼこ、ちくわ、焼きぎかな、チーズ、ハム、チョコレート、ミカン、リンゴ、バナナ、とにかくなんでもよく食べる。腹をこわすのも、この動物園一というところだ。つまり、アライグマはおちよこちよいなんだ。人間というのもたいいはおちよこちよいだから、同病相あわれむというやつで人気があるのかもしれない。

アライグマっていうのは名のとおり、食べものを水につけ、手で洗うようにして食べることもある。そんなとき、小さな子ども

もは手をたたいてよろこぶんだ。

どっちにしてもアライグマっていうのは、スターになる素質があるようだ。

アライグマのおりの前は、いつも、子どもたちの投げたおやつでいっぱいだった。

タヌキのおりの前にはなんにもない。人気がないのでおやつを投げってくれる子どもがいないんだ。

タヌキはいつもうつつとうしそうだ。ときどき、ちらっちらつと人間を見るだけで、あとは背を丸めてねている。まるでかわいげがないから、とうぜん人気もないというわけだ。

その少年は、アライグマなんかには目もくれず、そのいんきくさいタヌキのほうを、じっと見ているのだった。やっぱり亀山さんは首をひねった。

三度目にその少年に会ったのは、亀山さんが「なぜなぜチビツ子相談室」というラジオの公開番組に出ていたときだ。

どうしてナマズに地震じしんがわかるのですかとか、竹は木ですか草ですかとか、ゆうれいはほんとうにいるのですか、などという子どもの質問に、亀山さんのような専門家がこたえる番組だ。放送は公開だったので、場所は亀山さんの動物園だった。たくさんの子どもたちがとりまいて、にぎやかなふんいきのうちに放送がはじまったんだ。

亀山さんに質問がきた。

動物のことかと亀山さんが身をのりだすと、やっと五歳になったばかりくらいの女の子がいった。

「あのね。わたしね。となりのかずえちゃんとしき、けんかをしてしまうの。でも、すぐなかよくなるの。どうしてにんげんはけんかをしてもすぐなかよくなるの」

うーんと亀山さんはうなった。動物のことならなんでもこいなのだが、こういう質問はにがてだ。

「うーん。それはね。人間ってひとりぼっちで生きられない動物だからじゃないかな。友だちがなかったら人間は生きていけないだよね。すこし大きくなるとおよめさんをもろうだろ……おっと……女の子はおむこさんをもろうんだ……おっと……おむこさんをもろうというのはおかしいかな。ま、つまり、いつもだれかといっしょにいたいんだな、人間というやつは。あなたもね、いつも、ひとりぼっちはいや、ひとりぼっちはいやっていつてるのね。心がね。だから、けんかをして、じきなかよくなっ

てしまうのね」

亀山さんはハンカチを出して、ひたいの汗をぬぐった。だいぶ苦勞をしたけれど、亀山さんにしては、まあまああせの解答だ。<sup>③</sup>

そのとき、亀山さんはうしろで声をきいたんだ。  
「そんなことないよ」<sup>④</sup>

えっ、と亀山さんはうしろをむいた。そこにあの少年がいたんだ。けれど少年は亀山さんのほうを見ていなかった。少年は知らん顔をして前をむいていたんだ。亀山さんは三度、首をひねることになった。

いくらなんでも気にかかる少年だ。

亀山さんはそれ以来、あの少年が園にきているかどうか気にするようになった。けれど、皮肉なものだ。気にすると少年に出会わないのだ。きていないのかもしれないし、きていても会えないだけのことかもしれない。

放送があつて四日目のことだった。

亀山さんはチンパンジーにえさをあたえてから、ぐるっと園をまわっていた。

ペンギンのいる池のほうがさわがしかった。池のまわりに、たくさんの幼稚園児ようちえんじがいた。幼稚園の先生がペンギンを泳がせようとしている。しっしつと声をかけたり、持っている日がさをさくの中につっこんで、ペンギンをおいたてようとしていた。子どもたちはそれでさわいでいるのだった。

亀山さんは（A）した。

動物のくらしに心をくばらないで、人間のつごうだけでものごとを考える先生に亀山さんは腹をたてた。<sup>⑤</sup>おもわず身をのりだして、注意をしようとした。

そのときだ。あの少年の声がした。

「ペンギンは泳がないよ」

どうして、と幼稚園の先生はいった。

「ペンギンが水の中にはいるのは、えさをとるときだけだよ」

幼稚園の先生たちは顔を見あわせた。少年のことばをうたがっているようだ。

「ペンギンにもつごうがあるよ」

少年はいった。

亀山さんは心の中で手をたたきたいような気持だった。亀山さんのいいたいことを、この少年はみんないつてくれている。

亀山さんはそのとき、この少年と友だちになれそうな気がふとしたんだ。

亀山さんがすがたを見せると、幼稚園の先生はペンギンを泳がせてほしいとたのんだ。もちろん亀山さんはことわるつもりだった。けれど、じつと亀山さんのほうを見ている子どもたちのことを思うと、さすがにことわりかねた。亀山さんはペンギンのえさであるアジというさかなをとってきた。そして、子どもたちにもいった。

「この子がいったように、ペンギンはえさをとるときにしか水にはいりません。みなさんだって給食の時間があるでしょう。ペンギンはいまお休み中なんです。それをむりに起こして泳がせるのだから、しっかりと見てください」

亀山さんはえさを水の中にほうりこんだ。が、ペンギンは一ぴきも水にはいらなかったんだ。

亀山さんはしかたなく、手を大きくひろげて、ペンギンを水辺においよせ、ついに水の中へ入れた。子どもたちは拍手はくしゅをした。けれど、なんとということだ。ペンギンたちは水の中にはいっても、ただ、浮うかんでいるだけで、えさのほうにも行かないし、もちろん泳ぎだもしなかった。亀山さんがおうのをやめると、ペンギンたちはさっさと陸へ上がったんだ。

「ペンギンがかわいそうだよ」

そのとき、あの少年がいったんだ。

「そうだね。こんなむりなことをしてはペンギンがかわいそうだね。みんな、陸に上がっているペンギンをよく観察してください。はねをひろげてぶるぶると水をはじいてかわかしたあと、くちばしをおしりのほうにむけて、おしりのはねをそうじしているのは、しっぽのつけねに油の出るところがあるからです。ペンギンはいつ、どんな敵におそわれるかわからないので、いつでも水にはいれるよう、ああして、からだに油をぬっているんです。からだを休めているのも、みんな自分のいのちをまもるためなんだ。だから、むりに泳がせるのはたいへんにいけないことなんだけど、みんな、わかってくれるかな」

亀山さんがそういうと、子どもたちはなにかわるいことをしたように、小さな声で、はーいといった。

亀山さんは子どもより先生にきかせたいようなくちぶりだ。

「ペンギンは、ほんとうはね、クジラが食べるようなエビやオオアミを食べるのだけれど、動物園では、そういうものを食べさせることができないから、れいとうのアジやイワシを切ってあたえているんです。いってみれば、みんながごはんを食べたいのに、それが食べられないじょうたいなんだね。ペンギンもがまんしているんだから、見にきたみなさんもすこしはがまんしてほしいのです」

こんどは、子どもたちも大きな声で、はーいと返事をした。

少年は、そんな亀山さんをじっと見ていた。

亀山さんは少年を見て、ふと思った。

きょうも火曜日じゃないか。どうして、この少年は学校へ行かないんだ。

「むだになったなあ。そのさかな、バケツに入れてくれへんか」

幼稚園の子どもが行ってしまったと、亀山さんは、くだけた調子で少年にいった。

少年は声をださないでうなずいた。

「きみの名前はどいうのんや」

やっぱり亀山さんのはのんびりした調子でいった。

「うらやま、けんじ」

少年はこたえた。

「けんちゃんか。ええ名前や。これから、けんちゃんってよんでもええか」

「かまへん」

少年も関西のことばになっていったんだ。

「動物、すきか」

「……………」

「よう動物園にきとるようやけど、どうして、そうたびたび動物園にくるんや」

「……………」

きいてわるかったかな、と亀山さんはやさしくいった。

「ぼく……………」

と、少年は口ごもった。

「ぼく、人間きらいやねん」

「さよか」

と、亀山さんはあっさりいった。

少年と亀山さんがはじめてかわした会話だった。

「ぼくも人間がきらいで動物の世話をしだしたくちやけど、人間がすきで、動物がすきになるほうが、うんとうんと動物ずきになるもんや。……………はあ、そんなもんやで」

少年はちらつと亀山さんを見上げた。

「すまんすまん。これ、お説教くさいな」

と、亀山さんはいった。それから、

「あつ、わすれとった。おれの名前は……………」

亀山博さんやろ、と少年はいった。

「なんや知つとつたんかいな」

「世界でさいしょにチンパンジーの人工飼育に成功した人やろ。だれでも知ってる」

亀山さんはてれくさそうにわらった。

「亀山さん」

「うん」

「亀山さんはどうしてチンパンジーの子どもなんか育てたんや」

「うーん。どうしてやる」

「チンパンジーの子どもがかわいいそうやったからか」

「うーん。かわいいそうということはないな。うーん。なんていうたらええかな。夜、ろうそくに火がともっているとするか。風で火が消えそうになるとするか。そんな火なんか消えてしまえと、けんちゃんは思うか」

「思わへん」

「おれもそのとき、けんちゃんとおなじ気持やった。そやからチンパンジーのあかちゃんを育てたんやろな。いのちというものは消えるのがわかりする。生まれるとからだのまん中がいつまでもあつたかいもんや。そんな気持、わかるか」

「ちよつと」

ちよつとか、そうかちよつとか、ちよつとでもわかつてくれたらええ、と亀山さんはゆかいそうにわらった。

「さつき、けんちゃんがペンギンにもペンギンのつごうがあるといってくれたな。あるとき、おれはうれしかったぞ。動物はみんな自然からのかりものや。遠いジャングルや氷山からつれてこられて、やけも起こさず、みんないっしょうけんめい生きとる。動物の中にわるいやつが、たった一ぴき、たった一頭もないのは、みんないっしょうけんめい生きとるからや。人間もいっしょうや。いっしょうけんめい生きとるやつにわるいやつはおらへん」

あはは、また、説教くさなつたな、と亀山さんはわらっていった。

「そういうわけやから動物園の動物は、できるだけ健康で、たくさんの子どもが生まれるようにしてあげんといかんのや。それが自然からのかりものをかえすことにもなるのや」

ほら、この手を見てみ、と亀山さんはいった。少年がのぞきこむと、亀山さんの左手にふかいきずあとがあった。

「おれはかんちがいをしとつたんやなあ。ゾウにラップアふきやごばん乗りをしこみ、ヤギやサル、クマまでステージにつれだして、芸事を教えた。クマにまたがり、とつくみあいのすもうをとり、おれはそのころ、うちょうてんやった。このきずは動物のしかえしじゃない。神さまがおれのおごつた心をしかりはつたんやな」

少年は、亀山さんの左手をそつとなでた。



〈中略〉

数日後、亀山さんは園長さんによばれた。

園長室にはいつていくと、まちかねていたように園長さんは口をひらいた。

「きみのかわいがっている男の子は不<sub>レ</sub>就<sub>二</sub>学<sub>一</sub>児<sub>レ</sub>童<sub>一</sub>のようだね」

「そのようですね」

亀山さんはおちついてこたえた。

「この園は市の施設<sub>しせつ</sub>なんだから、学校に行かない子どもがここにくるのを、われわれがだまって見ているというのはどんなものかねえ」

「そうですね」

やっぱり亀山さんはおちついていた。

「もちろん、きみは学校の教師ではないのだから、あの子をどうこうする義務はないんだけど、どうかね、いちど、あの子に学校に行くように話してみては……」

「話しているつもりなんですがね」

と、亀山さんはいった。

「けんちゃんを……あの子の名前ですが、かれをチンパンジーとくらべるのはよくないかもしれませんが、さびしがりやで、いじっぱりで、そのくせ、やさしい気性の持主のところなんか、おれの育てたチンパンジーとそっくりなんですよ。いそいでなにかをきこうとしたり、いそいでなにかをやらせようとする、その、いじっぱりなところがでてくるんだなあ。へんに同情したりすると、おれ、さびしくないよって、やっぱりうしろをむいてしまう。ほんとにふしぎなくらいにているんです。人間の心も動物の心もおなじなんです」

園長さんはうなずいた。ながいあいだ動物園にいたので、そのへんのことはよくわかるのだ。

「けんちゃんとおれとは、とうぶん友だちでいさせてくださいよ。そのうち、きっとけんちゃんのほうから、なぜ学校に行かな

いのか、話してくれるようになると思いますから」

「そうかね」

と、園長さんはいった。

「われわれがなにもしていないと思われるのはこまるので、学校のほうに連絡<sup>れんらく</sup>だけはしておいてくれんかね」

園長さんはいつのまにしらべたのか、少年の学校名をいった。亀山さんはちよつといやな顔をした。しかし、じきしかたがな  
いというような顔にもどつて、うなずいた。

「そうですか。動物園に行っていたのですか」

少年の受けもちの先生は、わかい女の人だった。

「そうですか。動物園に行っていたんですか。やっぱり、あの子、さびしかったんですわ。やっぱり……」

「やっぱりってなんですか」

と、亀山さんはたずねた。

「ひと月ほどまえから、けんちゃんのおとうさんは、けんちゃん&けんちゃんのおかあさんと別れてくらすようになったんです。けんちゃんのおとうさんは公害運動のリーダーをなさっておられる方で、生活の全部をその運動につきこまれています。おうちが薬局でしたから、とてもたいへんだったと思います。けんちゃんのおとうさんとおかあさんはなんかいも話し合われたらしいのですが、けつきよく別居ということになったようです。どちらもありっぱな方でしたから、ほんとうにざんねんですわ」

「そうでしたか」

と、亀山さんはいった。<sup>⑦</sup>すこし声がしめっていた。

「けんちゃんって、とってもいいやつですね」

亀山さんはいった。

「ええ、とってもいい子なんです。とても心のやさしい子なんです」

先生の声はちよつとふるえていた。

「おれの……おれの小さいときとよくにってるんですよ」

「そうですか」

「いじっぱりで、さびしがりやのところなんか、そっくりなんですよ」

そういつてしまつてから、亀山さんはやけに胸があつくなつたんだ。

「けんちゃんつてやつは、むかしのおれにそっくりなんです」

小さい声でいうと泣きそうになるので、亀山さんは、まるでどなるように話していた。

「けんちゃん、行くか」

亀山さんは元気な声をだした。

四時になると、動物の食事どきになる。亀山さんたちの、いちばんいそがしくなるときだった。

少年はながぐつをはいて、一人まえの飼育係のようなかっこうをしていた。

顔をまっかにさせて、えさのいっばいはいったバケツをさげていた。

動物がえさを食べるのを見るのが亀山さんたちのいちばんしあわせな時間だった。そして飼育係のおじさんたちの顔が、いちばんうつくしく見えるときでもあった。

からのバケツをぶらさげて、亀山さんと少年は坂道をおりてきた。

「けんちゃん、おれな」

亀山さんは夕やけを見ながらいった。

「おれ、いっぺん家出をしたことがあるんやで」

少年はびっくりしたように亀山さんの顔を見た。

「チンパンジーのあかちゃんを育てているとき、おくさんとけんかをしたんや。自分の子どもとチンパンジーとどっちがだいじやつていうから、どっちもだいじやつていうたら、おくさんがヒステリーをおこしたんやな。あほ、チンパンおやじ、なにぬかすこのヒステリーばあめつていうわけで大げんかや。おれはチンパンジーをだいて、おくさんはむすこの手を引いて、どっち

も家出や。けどなあ、けんちゃん。いつしようにけんめい生きとるもんは、みんな仲間や。いまは、おくさんのほうが、チンパンジীরめんどうをようみてる」

亀山さんはそういって、少年の肩を力強くたたいたんだ。

つぎの日のことだった。

やっぱり、朝、亀山さんは少年のすがたを見た。少年はインドニシキヘビをじっと見ていた。しゃがみこんで、少年は石のよ  
うにヘビを見つめていた。

⑧ きょうも学校に行けなかったな、よわむしめ——亀山さんは少年に近づいた。そして、ぎよつとした。

ニシキヘビのおりのすみに、一羽のウサギが小さくなっておびえている。少年はそれをじっと見ているのだった。  
しまった、と亀山さんは思った。

動物の中にはどうしても、生きたえさでなければ食べない動物がいる。しかたのないことだが、そんなざんこくな場面はお客様さんに見せないように、閉園後、えさをあたえるようにしている。毎朝、開園前にえさを食べているかどうかしらべてまわるのだが、この日にかぎって、ほかのことに手をとられ、は虫類舎に行くのがおくれたのだった。ニシキヘビが食べるのこしたえさのウサギがそこでふるえていたのだった。

「けんちゃん」

声をかけようとして、亀山さんははっとした。少年は、目にいっぱい涙をためているのだった。⑨

亀山さんとはつさに決心をした。

かぎをあけるのもどかしく、亀山さんはヘビのおりの中へとびこんだ。

とつぜん、ニシキヘビはかま首をもたげた。こうげきのあいずだった。S字型にまげた首をぱつとのばしておそいかかってくるのだった。

「おじさん！」

少年は悲痛にさけんだ。

亀山さんはニシキヘビのこうげきを必死でさけながら、すきを見て、ほうきの柄えでヘビの首をしたたかについた。ニシキヘビがひるんだ。そのすきに、亀山さんはすみっこウサギをひたくるようにして外にほうりだしたのだった。

亀山さんのからだがよろけた。そこへ、ヘビのこうげきがきた。さけきれず亀山さんは、素手でニシキヘビの首をつかんだ。その手が横にすべった。

「あっ！」

亀山さんは声をあげた。ニシキヘビのするどい下あごの歯が、亀山さんの右手にささった。鮮血せんけつがとんだ。

「おじさん！」

少年はまたさけんだ。

亀山さんはこんしんの力をこめて、ニシキヘビのあごをはずした。

おりからころげ出た亀山さんは、さすが青ざめ、汗びっしょりだった。<sup>⑩</sup>少年は泣きながら、亀山さんにもしゃぶりついてきた。

「もう心配ないよ」

亀山さんはそういって、目をまっかにしている少年の頭をなでた。

「ほんとうに心配ない？」

「たいしたきずじゃない。かるいかるい」

亀山さんは陽気にいった。

「ぼく、（B）」

と、少年はいった。

「ぼうず、おじけづいたな」

「ちがう！」

少年はきつぱりいった。

「おじさん、いったやろ。いっしょうけんめい生きてるもんは、みんな仲間だって。ぼく、おじさんの仲間にしてもらうんや。」

とうさんやかあさんの仲間にしてもらうんや。そやから、ほく、（ B ）！」  
亀山さんはしっかり少年を見た。

少年の目にうつくしいかがやきを見た。

（灰谷健次郎『ひとりぼっちの動物園』より）

※出題の都合上、表記のしかたを変えたり省略したりしたところがあります。

問一 ——線①「あれっと思った」理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 毎日動物園に通う子どもなど、これまでに見たことがなかったから。

イ 少年がこの日は珍しく、火曜日の午前十一時にいたから。

ウ 少年の顔をよく見ると、小学校何年生かよくわからなくなったから。

エ 少年が、いつもあまり人気のない動物のおりの前ばかりにいるから。

オ 小学生らしき少年が、学校のある時間に動物園にいたから。

問二 ——線②「おやつと思った」とほぼ同じ意味で用いられている表現を、本文中から六字で抜き出して答えなさい。

問三 ——線③の「亀山さん」の「解答」には、彼の体験がふまえられていると考えられます。その体験を彼が語っている会話

文を本文中から探し、初めの十字を抜き出して答えなさい。

問四 ——線④「そんなことないよ」とありますが、「そんなこと」とは具体的にどのようなことをさしていますか。本文中の表現を用いて四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問五 (A)に入る、最も適当な語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア したうち                    イ めくばせ                    ウ まばたき                    エ せきばらい                    オ あしぶみ

問六 —線⑤「人間のつごうだけでものごとを考える」について以下の各問いに答えなさい。

- (1) ここでは具体的に誰がどうしようとしているのですか。それが書かれている一文を本文中から探し、初めの五字を抜き出して答えなさい。

(2) 「亀山さん」も過去に同じようなことをしましたことがあります。彼の具体的な行為を示す会話を本文中から探し、初めの十字を抜き出して答えなさい。

問七 —線⑥「心の中で手をたたきたいような気持」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 激励                    イ 賛同                    ウ 納得                    エ 尊敬                    オ 皮肉

問八 —線⑦「すこし声がしめっていた」とありますが、ここでの「しめ」るの意味として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 落ちつく                    イ 衰える                    ウ うるおう                    エ 沈む                    オ 静まる

問九 — 線⑧ 「きょうも学校に行けなかったな、よわむしめ」とありますが、この時の「亀山さん」の気持ちの説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 励まし続けても以前と変わらない「少年」に対する落胆<sup>らくたん</sup>。
- イ かつての自身と似ている「少年」に対する親しみのこもった気持ち。
- ウ もう登校することなどにこだわらなくていい、という投げやりな気持ち。
- エ これまでと違<sup>ちが</sup>った方法で勇気づけようというなみなみならぬ決意。
- オ これからも学校に行けないだろうと半ばあきらめながらもいらだつ気持ち。

問十 — 線⑨ 「少年は、目にいっぱい涙<sup>なみだ</sup>をためているのだった」とありますが、この「涙」にこめられた「少年」の気持ちを、具体的に二十五字以内で答えなさい。

問十一 — 線⑩ 「少年は泣きながら、亀山さんにむしゃぶりついてきた」とありますが、この涙にこめられた「少年」の気持ちをあらわす一語を、本文中から抜き出して答えなさい。

問十二 ( B ) に入る最も適当な表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一人で来るの、やめる
- イ これから学校に行く
- ウ 将来、動物園で働く
- エ あしたから動物園にこない
- オ 今日からいっしょうけんめい生きる



## 二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

科学技術の発達はひたすら加速の度を高めている。半世紀前、私の子どもころのサイエンス・フィクションが百年後、二百年後の夢として描いてみせたことなど、とつこの昔に実現されてしまい、現実はそのをはるかに上まわってしまった。

人類は今や本当に宇宙空間に居を構え、核を分裂させたり融合させたりして巨大なエネルギーを引き出している。それは、一瞬の間に地球上の全生物を絶滅させうるほどのものである。試験管のなかで人間を誕生させ、動物の臓器を人間に移植し、遺伝子を組み換えて生物の新しい種をつくり出す。これらはすべて、かつては神の業とされていたものである。今では人類はそれを、ほとんど日常茶飯のこととして引き受けるまでになっている。

こうした科学技術の発達がわれわれの生活を途方もなく便利にしてくれたことは確かである。食糧生産技術は大勢の人間を餓死から救ってくれ、医療技術は患者やその家族に光明をもたらししている。身のまわりを見まわしただけでも、どれだけわれわれが科学技術の恩恵に浴しているか、数え出したらきりもない。

\*

しかし、その同じ科学技術が地球の資源を枯渇させ、環境を破壊し、人類を絶えず絶滅の危険にさらしていることも、これまた言うまでもない。科学技術は明らかに②の剣なのである。はたして人間にはこの危険な武器を無事に使いこなしてゆく力があるのだろうか。

もつとも、こうした危惧は今にはじまったことではない。二千五百年もの昔、すでにギリシアの悲劇詩人が、「不気味なものはさまざまにあるが、人間以上に不気味なものはない。」と歌っている。人間は技術を駆使して、海を渡ってどこまでもゆくし、神々のなかでもつとも不朽なものだとされてきた大地をさえも飽くなく鋤きかえして疲れさせ、鳥や獣や魚を捕らえ、たくみに天災を避け病をいやすが、その技術が人間を善にも導けば悪にも導くからだ、というのである（ソフォクレス『アンチゴネー』）。となると、もつとも不気味なものとは、人間というよりも人間のもつ a だということになる。

しかし、そうした不気味な可能性を秘めてはいたにせよ、どの文化圏にもしかるべき生活技術はあって、それがいわば自然と協調しながら人間の暮らしを助けてきた。古代ギリシアにおいても、技術を意味する（「テクネー」ということばは、同時に芸

術をも意味していたのであり、そうした技術＝芸術はむしろ自然の働きの一環、ないしはせいぜいそのちよつとした延長と受けとられていたのである。われわれの父祖が木を一本切りたおすにも祈りをささげ、その木の命を生かすようにそれを削り、柱を立て屋根をかけ、雨露をしのいだそうした生活技術は、けつして自然を枯渴させ死滅させるようなものではなかったにちがいない。

その技術が西洋と呼ばれる文化圏である時期から異常に肥大しはじめ、悲劇詩人のあの危惧が現実のものとなってしまった。しかも、その異常に肥大した技術は、西洋という圏域を越えて、まるで癌細胞が全身を侵してゆくように、世界大の規模で増殖しはじめたのである。

危険なものになってきたからというのでこれを放棄することなど、人類にはもうできそうにない。危険だと分かりながらもそれに頼るしかないのだが、その危険の水位はどんどん高まってゆくという抜きさしならない状況に、いま人類は置かれていることになる。

こうした不気味なものに対処するうまい知恵など、私にもあるわけではない。ただ、私には、今日人類が直面しているこうした抜きさしならない事態を招いた原因の一つが、技術というものについてのわれわれの<sup>⑤</sup>とんでもない思い違いにあるように思えてならないのである。

\*

われわれはこう教えられてきた。( i )、科学は人類の理性の産んだ偉大な叡智である。もともと科学は実用などとは無関係に、ひたすら物を冷静に見つめることから得られる無垢な知恵だったのである。それをたまたま実生活に応用したのが技術なのであり、その意味では技術も間接的には理性の所産である。人類の理性が産み出したものを、人類が理性によってコントロールできないはずはない。われわれ人類には、この程度のもを理性的にコントロールする力は十分あるはずだ、と。

( ii )、本当にそうであろうか。

人類の「 A 」が「 B 」を産み出し、その「 B 」が「 C 」を産み出したという、この順序に間違いはないのであろうか。しかし、ギリシアの詩人が不気味だと恐れていたのは、人類の理性の所産である科学技術などではなく、ただの技術である。科学が技術を産んだというのは間違いではないのか。( iii )、技術が異常に肥大してゆく過程で、あるいはその準備

段階で科学を必要とし、いわばおのれの手先として科学を産み出したと考えるべきではないだろうか。

(iv)、その技術にしても、人類がつくり出したというよりも、むしろ技術がはじめて人間を人間たらしめたのではなからうか。原人類から現生人類への発達過程を考えれば、そうとしか思えない。火を起こし、石器をつくり、衣服をととのえ、食物を保存する技術が、はじめて人間を人間に形成したにちがいないのだ。

こうした技術に助けられて、その日暮らしの採集生活が可能だった熱帯・亜熱帯地方を離れ、寒冷な中緯度地帯に進出することのできた原人が、明日を生きるために今日から準備しておかねばならない生活のなかで、その時間意識にいわば過去や未来といった次元を開くことになり、こうしてはじめてホモ・サピエンスになりえたのだからである。

私が問題にしたいのは、技術は人間が、あるいは人間の理性がつくり出したものだから、結局は人間が理性によってコントロールできるにちがいないという安易な、というより倨傲な考え方である。<sup>(注)</sup> どうやら技術は理性などというものは違った根源をもち、理性などよりもっと古い由来をもつものらしいのだから、理性などの手に負えるものではないと考えるべきなのである。

\*

確かに技術が人間を助けてくれることは多い。もともと人間を人間にまでつくりあげてくれたものなのだから、それは当然であろう。だが、だからといって、技術の真意が分かったとか、技術が人間の意のままになるなどと思わないほうがよい。技術の論理は人間とは異質なもの、人間にとっては不気味なものだと考えて、畏敬しながらもくれぐれも警戒をおこらないほうがよいと思うのである。先ほど引いたギリシアの詩人は、すでに十分にそのことに気づいていたように思われる。

技術のこの正体を見きわめることが、哲学のこれからの重要な課題になるであろうが、しかしそれは、これまでのように単に技術をいかにコントロールすべきかとか、科学知の論理と技術の論理の対比とか、技術と経済構造の関係を問うといったところにとどまってはなるまい。技術の人類史的な意味や、技術と芸術の同根性とその差異といったことをまでも根源的に問い、畏れるものは畏れるだけの節度をわきまえたそうした技術論の展開が目指されねばならないのである。

(木田元『技術の正体』より)

※出題の都合上、表記のしかたを変えたり省略したりしたところがあります。

(注) 倨傲……おごりたかぶるいこと。

問一 — 線①「神の業とされていた」とはどのようなことを意味しますか。わかりやすい別の表現に改め、十五字以内で説明しなさい。

問二 — 線②「両刃の剣」とは、科学技術のどのような点を表現していますか。文中の言葉を用いて五十字以内で答えなさい。

問三 — a に入る漢字二字の言葉を文中から抜き出して答えなさい。

問四 — 線③「生活技術」について、筆者が考える「科学技術」と根本的に違う点は何ですか。それを説明している次の一文の ( a ) ( b ) ( c ) ( d ) に当てはまる語を次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

生活技術は ( a ) を枯渇させ ( b ) させるようなものではなく、( a ) と ( c ) しなから ( d ) の役に立ってきた点。

ア 自然                      イ 人間                      ウ 科学                      エ 生産                      オ 協調                      カ 死滅                      キ 進化

問五 — 線④「抜きさしならない状況」とありますが、具体的にどのような状況を意味しますか。五十字以内で答えなさい。

問六 — 線⑤「とんでもない思い違い」の具体的な内容を述べている四十字以内の一文を見つけ、初めの五字を抜き出して答えなさい。

問七 ( i ) ( ii ) ( iii ) ( iv ) にあてはまる語を次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア だが                      イ そして                      ウ つまり                      エ むしろ                      オ もちろん

問八 ———線⑥「無垢むくな知恵ちえ」とありますが、筆者が科学をこのように言い表すのはなぜですか。理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 科学は感情や利害に流されることなく、あくまで人類の福祉ふくしのために平和利用されるべき知恵であるから。
- イ 科学は理性が産んだ叡知えいちであり、あらゆる文化の違いを超えた、普遍的な真理であるから。
- ウ 科学は客観的で公平な理性が産んだ万人のための知恵であり、技術を統御とうぎよできる唯一ゆいいつの存在だから。
- エ 科学は実用性や利便性といった功利的な発想とは異なる、純粹じゆんすいな観察と分析ぶんせきから生まれた知恵であるから。

問九 「A」 「C」 に当てはまる最も適当な語を、本文中からそれぞれ漢字二字で抜き出しなさい。

問十 ———線⑦「技術がはじめて人間を人間たらしめた」とありますが、具体的にはどのような状況を指しますか。次の中から当てはまるものを全て選び、記号で答えなさい。

- ア 燃料を用いて火を起こし、利用した。
- イ 仲間と協力して獲物えものをとることができた。
- ウ 衣料に工夫を加えることができた。
- エ 自然を制する手段かんとくを獲得した。
- オ 集団で暮らし、社会を形成した。

三次の——線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

- |   |                                   |    |                    |
|---|-----------------------------------|----|--------------------|
| 1 | カモツ列車が通過する。                       | 2  | カダンに行動する。          |
| 3 | まだ返事をホリユウしている。                    | 4  | トウブンの取りすぎは健康によくない。 |
| 5 | 被害 <small>ひがい</small> から町がフツコウする。 | 6  | 通りにガイロジユを植える。      |
| 7 | 港からキテキの音が聞こえる。                    | 8  | 単純メイカイな考え方で行動する。   |
| 9 | 委員をやめる。                           | 10 | 小さくアツシユクしてしまう。     |



国語解答用紙

(字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。)

一問一  問二  問三

問四

問五  (1)  (2)

問七  問八  問九

問十

問十一  問十二

二問一

問二

問三  問四 a  b  c  d

問五

問六  問七 i  ii  iii  iv  問八

問九 A  B  C  問十

9	5	1
める		
	10	6
	7	3
	8	4
評		点
<input type="text"/>		



受験番号

氏名